

第44回中学生人権作文コンテスト

兵庫県大会

最優秀賞

## 障がいのある人の生きがい

兵庫県内の中学校 3年 西園唯花

今年の春、私の家では、四つ上の姉が社会人になりました。姉には障がいがあるので、福祉就労という福祉制度を使った仕事に就きました。その仕事がどんなものか、家の中で、母と姉が話す仕事についての会話が、私の耳にも入ってきます。内容はいつも大体同じで、「みがくだけ」、「たたむだけ」のような仕事を、姉は毎日しているようでした。時給は、百二十円。私は、その金額を聞いてとても驚きました。それでも姉は、毎日休まず仕事に行き、家に帰ってきてからは、楽しそうに音楽を聴いて過ごしています。仕事場での様子を私は知らないけれど、毎日楽しそうにしているのは、姉にとっての楽しみ・生きがいがそこにあるからなのかなと思いました。お金や仕事内容でもない、人としての生きがいとは何なのか、私は気になりました。

家で姉が困っている時、私がそれを手伝うことがあります。すると、姉はよく怒りだします。例えば、乳酸菌飲料の蓋（アルミ箔）がとれなくて困っている姉を見て、私がそれを手伝おうとすると「やめて！」と言って、姉は怒りだします。暴言を使うくらい怒るときもあります。一方、暗いところが苦手な私は、「一階に一緒にについてきて。」と姉によく頼むのですが、そんな時は、姉は、「仕方ないな～。」と嬉しそうについてきてくれます。つまり、姉は、手伝われると怒りますが、家族からのお願いや頼まれた手伝いは嬉しそうにやってくれるのです。

私たちは、家族、クラス、社会というそれぞれの集団の中で、それぞれの立場に応じた自分の役割をもっています。例えば私は、家族の中だと、食器拭きや洗濯物をたたむという役割があります。今の私は、それを喜んでいるとは言えませんが、それは、その役割をするかしないか選択できるから、そこに価値を感じにくいのだと思います。姉をはじめ、多くの重い障がいのある人は、「助けられるべき人」と位置付けられていて、だれかを手助けするという選択肢が、最初から与えられていないと思いました。例えば、仮に私がAという作業ができなくて誰かに手伝ってもらいたいと思った時、「Aの作業ができる障がいのない人」と「Aの作業ができる障がいのある人」が目の前にいたら、きっと、前者の人に声をかけると思います。私たちは、知らず知らずのうちに、障がいのある人は、私たちが「手伝ってあげる人」と位置づけ、その人ができることでもその人には頼まな

いようにしてしまっていると思うのです。

このようなことから、人は、自分の大切な人や関わりのある人のために何かができるということが自分自身の喜びになったり、存在価値を高めたりするのではないかと考えました。つまり、自分がなにかをして、相手が喜んだり、助けられたりすると、「生きていてよかったです。」「だれかに自分の存在が喜ばれた。」と感じて、自分の存在を価値のあるものとして実感することができるのだと思います。それが、その人の生きがいにつながるのだと思います。そう考えてみると、私が家で姉を手伝うと、姉は怒り、逆に何かを頼むと、姉は嬉しそうにしていることに納得しました。

よく考えてみると、これは、障がいのあるないに関係ないことにも気づきました。私も家族や知り合い、友達から頼られると、自分を必要としてくれている人たちがいると感じて、嬉しくなります。今の世の中では、多くの場合、障がいのある人は、「助けられるべき人」として認識されています。しかし、そういった考えによって、障がいのある人が頼られることのない社会になってしまっているとも思いました。

障がいのある人が、助けられるべき人、頼りにくそうな人という、世の中の認識を少しでも改善し、障がいのある人が活躍できる場を見つけることが大切だと思います。